

創業者の思いを受け継ぎ 「ア・ス・フ・カ・ケ・ツ」な 事業を

「商売は勘」「スピードは最大のサービス」「先の先を読む」一大和ハウス工業の創業者・石橋信夫は、我々の指針となる数々の言葉を残しました。

1955年に資本金300万円で立ち上げた大和ハウス工業を40年ほどで1兆円企業群に育て、大和ハウスグループの礎を築いた創業者。彼は、子どもたちが家に帰っても勉強する部屋がないと知ると、「ミゼットハウス」を考案。“3時間で建つ勉強部屋”としてデパートで展示即売も実施し、一大ブームを巻き起こすなど、世の中に必要なものを考え出し、新商品で新市場を開いた立派な人でした。

私はこの創業者の精神に新技術という要素を加え、“新技術で新商品を作り新市場を開拓しなければならない”と考え、「ア・ス・フ・カ・ケ・ツ」を新しい事業のキーワードに掲げています。「アス」は安全安心とスピード、そして「明日」とかけて21世紀を指しています。21世紀の世の中が必要とする「フ・カ・ケ・ツ」なもの—福祉・環境・健康・通信(ソフト)分野に特化した事業を展開していくという決意を込めた言葉です。

例えば福祉分野では、高齢化社会を見越して20年前にシルバーエイジ研究所を設立。いち早く医療介護施設事業に取り組み、これまでに2,300棟を超える施設を手がけています。また、介護・福祉用のロボットスーツの事業化も進めています。環境に関しても、住宅からのCO₂発生量の削減に寄与すべく、外張り断熱通気外壁や太陽光発電システムといった環境技術の商品化に加え、太陽光発電で生じた電気を蓄電するリチウムイオン電池の事業化をめざし、プロジェクトを推進しています。そのほか、家庭で体調がチェックできるインテリジェンストイレの開発など、各分野でオンリーワンの技術やソフトの開発に日夜取り組んでいます。

当社がなぜ常に新しい分野の事業展開を考えるのか。その理由のひとつには、創業者が亡くなる少し前に私に



樋口 武男 氏

Takeo Higuchi

大和ハウス工業会長・CEO

語った「100周年の時に10兆円企業群にしてほしい」という夢を実現したいとの思いがあります。本人はすでに故人となっていますし、100周年のころには私もいなくなっているでしょう。しかし、本当の事業家の夢とはそれほど壮大なものなのです。

50周年で1兆5千億円企業となった当社グループが10兆円企業群をめざすには、グローバル化は避けて通れません。だからこそ「ア・ス・フ・カ・ケ・ツ」の事業が必要なのです。そして、もう一つの重要な柱となるのがベンチャー企業や他社への出資。今までそれぞれの企業で努力してこられた方々に、引き続き意欲を持って頑張っていたいただきながら、双方がメリットを見いだせる手法を取って進めています。

こうして代々の経営トップが創業者の思いを受け継ぎ大切にしていけば、10兆円企業群の実現も不可能ではなくなるでしょう。しかし、自ら責任を取らないような人間がトップに立つと企業はすぐに駄目になってしまいます。ですから、次代を担うリーダーを見つけることが私の一番重要な仕事だと考えています。リーダーには仕事ができるといった最低限の条件に加え、先見力や統率力、判断力、人間力などが求められます。数値化して比較することができないこれらの能力をどう見抜くのか。私の判断基準は「勘」。創業者の言葉通り、企業経営も後継者選びも最後は「勘」なのです。ただ、その時に頼りとなるのは単なるヤマ勘ではなく、幾多の経験を積み重ねて研ぎ澄まされた「勘」だけだということは肝に銘じておかねばなりません。

談